INFORMATION

舞台芸術祭、にぎやかに開催中!!

1月27日のより恒例のシアトリカル應典院第3回舞台芸術祭「SPACE ☒DRAMA2001」がスタート。

今回は、期間中6つのプログラムを開催。現在までに、テレスコピックのダンス公演、劇団メロディアスメロンの演劇公演、第27回寺子屋トーク「新世紀アーツ解体新書」、子ども演劇ワークショップ、劇団風の子九州の公演が終了。

子ども演劇ワークショップでは、小学校低学年の子どもたちが3日間にわたるワークショップで、日ごろ学校教育の中では体験できない演劇活動に、いきいきと取り組む様子が印象的でした。

ファイナルを飾るのは「108シアター」。2月19日から23日までで、20・21・23日には、本堂ホールでのライブパフォーマンスが行われます。中でも23日には、ゲストに坂田明さんが出演します。また期間中には、アーティスト関本徹生さんの「アートマネキン・百八煩悩」も開催。108体の煩悩のマネキンが應典院を埋め尽くす過激なアート展示です。



モニターボランティア報告会 市民・協働・NPO

モニターボランティアの取り組みの締めくくりとして、昨年の12月2日に市民活動センター・神戸の代表実吉威さん、立命館大学キャリアセンターの三並高志さんをゲストに迎えてのシンポジウム「市民・協働・NPO～生きるチカラとしてのボランティア～」を開催しました。

まず、5名のモニターボランティアからが、今回の体験を通しての問題提起を発表。「熱意を継続させるために、人材・資金・運営方法などはどうあるべきか」、「NPOスタッフは経済的に自立できるのか」など、現在NPOや市民団体が抱える諸問題について、するどく指摘する意見がだされました。

実吉さん、三並さんからは、自らの活動について、モニターからの問題提起に対しての意見を述べていただきました。中で、NPOがこれからの社会で重要な役割を担っていく必要があるのではないかということ、そのためにやはり多くの人々の理解と参加が必要であるとのことは、参加者も共通の認識でした。

モニターボランティアのみなさんの今後の活躍を期待します。

新しい世紀に願いをこめて 年忘れ交流会

20世紀最後の主催事業は、恒例の年忘れ交流会。去る12月26日、應典院の恒例行事「自分感謝祭」の第2部終了後に開催、20数名のご参加がありました。

にぎやかに交流の輪がひろがる中、やはり話題は20世紀のこと、そして来るべき新世紀について。自分感謝祭に引き続き、新年というより、新しい世紀を迎えるにあたって、自分自身の生き方を見つめ直す、意義深い場となりました。

いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

毎月第3木曜に開催しています。どなたでも参加できます。ぜひあなたもいらしてください。

第7回 3月15日(木)
「ネパールの子どもたちのいのち」
話題提供者
ネパールの子供を育てる会・会長
槇本昭彦さん
◎時　間:午後6時30分～
◎参加費:500円
◎会　場:應典院
お申し込みは事務局まで。

【新入会員ご紹介】

(2000年2月20日まで)

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
黒崎　洋子　大阪市北区
福井　尚子　岸和田市
【京都府】
安部　知子　京都市左京区

サリュ VOL. 24
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2001年2月20日
(偶数月発行)
編集人　池野亮、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

[サリュ]
フランス語で救いの意

2000 FEBRUARY
vol.24



ひょんなことから、里みちこさんという方に会った。詩がたりをしたり、書をかいたり、根っからの"自由(＝字遊)人"里さんは、ことばで遊ぶのが大好き。そんな里さん自作の詩、『カ行で生きる』をご紹介。

かざらず　かまえず　かたよらず／きばらず　きどらず　きめつけず
くさらず　くじけず　くるしまず／けろけろいまの／ここを生きる

CLUB TOPICS

「NPOの評価」をどうする!?
～“モニターボランティア”という試み～

昨年、11月4日～12日の9日間にわたって開催されたくコモンズ・フェスタ2000〉。22のプログラムが実施されるのと併行して、モニターボランティアたちが活動しました。

このプロジェクトは、大阪コミュニティ財団の助成事業として実施、イベント運営や各団体の見学などを通して、NPO（非営利団体）の現場を知ってもらう一方、「第三者の視点」を寺町倶楽部の活動の活性化につなげることを狙いとしていました。

モニターがコモンズを通して見たこと、感じたことは何だったのか。そして、モニターから提示された課題に、應典院寺町倶楽部はこれからどう取り組んでいくのかなど、考えるヒントがたくさん詰まった報告書をここにご紹介します。

（モニターの活動報告を、事務局で抜粋・編集して掲載しています）

■「自分にできることは何か」を考えたい

井上眞由美さん
（主婦）

「おもしろいお寺があるのよ」と、友人から聞いていた應典院。いつか行ってみたいと思っていたある日、コモンズフェスタ2000のパンフレットを見つけ、それぞれのテーマが魅力的だったことと、NPOのことを知るいいチャンスだと思い、モニターボランティア応募しました。

幼児をもつ母親として、子どもに関するプログラムにいくつか参加。なかでも、あかね連絡会が主催した丸山祐一郎さんのコンサートは、たくさんの方々の熱意、やさしさ、思いやりのようなものがベースに溢れ、心に残る忘れられないものになりました。幼児も大人も、障害のある人もない人も、みんなで演奏に参加したりシャボン玉を追いかけたり、自然に自分を解放する心地よさを感じたからです。

けれど、後日、「いつも採算が合っているわけではない」と聞いてショックを受けました。すばらしい企画は一人でも多くの人に楽しんでもらいたいし、ずっと継続してほしい、経済面で無理なく続けていってほしいのに……。容易ではないと思いますが、どう解決していったらいいのかを考える、それが課題だと思いました。



モニターとしてコモンズに参加して、いい出会いをたくさんいただきました。また、楽しいことに誰もが心地よく参加できることを大切にするNPOを応援したいという気持ちをさらに深めるとともに、自分自身も一歩踏み込んで、出会いやつながりをひとつでも増やしていきたいと願っています。

■NPOの理想と現実

松井年志子さん
（会計士）

モニター募集の新聞記事を見て応募しました。

NPO法人の設立に関わっていたので、他のNPOの活動を見ることができ、多くの人々とのネットワークを広げられる、いい機会だと思ったからです。

実際に多くのNPOの活動をかいま見て、まずその多様性に驚くとともに、昨今、華々しくとりあげられているNPOの実情はとてもきびしいことなどを知り、認識を新たにしました。



これまであまり出会うことのなかった人々とも交流することができましたし、とくにNPOに関わる人々の生の声を聞くことができたのは貴重な体験でした。

コモンズのように多様なNPOを集めたイベントは、他に例のない試みで貴重な場だと思いますが、あえていうなら、抽象的で何を目的としているのかが見えにくく、全体としてのまとまりに欠けるように思いました（意図的にまとめていないのだと思いますが……）。

また、プログラムによっては集客が少なく、寂しく感じるものもありました。今後は各団体に集客状況を事前に確認し、少ないものについては主催者側でもなんらかの対策を講じるとよいのではないでしょうか。参加団体と参加者や、参加団体同士の交流の場を増やすことも大切でしょう。

お寺が「こころの文化の創造」を支援するという取り組みはすばらしいと思うので、これからもずっと私たちのこころを豊かにしてくれるような活動を続けてほしいと思います。

■NPOは「もう一つの就職先」になり得るか?

後藤史さん
（立命館大学3回生）

以前から應典院とはインターンシップを通して関わりがあったのですが、モニターボランティア公募のことを知り、インターンとは違う立場で文化・芸術支援についてもっと学びたいと思い、参加しました。

モニターボランティアの活動でよかった点は、NPOの実態や実情をより明確に知ることができたことです。「NPO」といってもいろいろな団体があることはメディアを通して知っていました。

しかし、コモンズフェスタの参加団体や各プログラムのゲストの方々から実際に話を聞いてみると、勝手な思い込みや、報道によるズレがあることに気づきました。メディアから受けとる情報についても考えさせられ、とても多くのことを学べたといえるでしょう。



残念に思った点は、コモンズフェスタ全体の主旨を、参加者全員に伝えるような努力がなされていなかったのではないか、ということです。



一参加者として来るのであれば、全体の主旨や、應典院と参加団体との関係などを知る必要はないのかも知れません。しかし、それらを理解した上で参加していれば、別のつながりや成果が生まれる可能性があるように思うのです。

また、就職活動を控えた学生という立場から考えると、NPOを就職先の一つとして位置づけられるような社会にしていくべきなのかどうか、またそれは可能なことなのかどうかについても、考えていく必要性を感じています。

■NPOの課題～組織論～

川口英俊さん
（往生院六万寺　副住職）

NPOの存続のむずかしさ、その問題点についてまず考察してみたい。整理すると①資金源（継続のための収入）、②人材、③運営能力、④事業計画の安定性などがあげられる。

収入ということを考えた場合、非営利団体という枠の中で利益追求をしない社会奉仕精神は確かに賞賛すべきであるが、安定した収入がないと専属職員の不安は拭えない。さらに運営の拡大、ボランティアを使った多様性ある活動も望めなくなる。活動支援のための法改正による税制上の優遇、政府による基金設立による資金援助などが必要である。

人材については、現状では、若者にとってはきびしく、リスクの高い職場であるといわざるを得ない。現実を重視した活動への参加をしないと、NPOの活動が失敗した場合、人生設計の修正が余儀なくされ、有能な人材が埋没してしまう可能性が高い。

運営能力については、一般企業よりも高度な経営マネジメントが必要である。多くの専属スタッフが雇えないかぎり、集金活動、無駄が許されない収支決算、無償ボランティアの登用など、すべて代表が責任を負って処理しなければならない。

事業計画の安定性に関しては、歳出に無駄を生じさせない運営が重要になる。一円も無駄にできない予算をどのように効率よく配分するかの吟味は重要である。そのためにも、徹底的な事業評価システムの導入、第三者モニターによる事業の数値化による評定などできびしくチェックするとともに、将来性についてもしっかり見極めなければならない。

外からもってくるのではなく、すでにあるものに気づくこと、まだ見えないものを発見することなのです。そして、その“かけがえのなさ”に気づかせてくれるものがアートで、未知なる体験、こころにしみるものとの出会い、思いがけない発見や気づきなど、アートの果たす役割は大きいですね。

EVENT REPORT

第26回寺子屋トークスペシャル
いま、「個」として生きる意味を問い直す
～21世紀法要を振り返って

クリスマス・ムード一色に染められた12月24日（日）、應典院で芥川賞作家の辺見庸さんを招いて、「20世紀を振り返り、新たな世紀をどう主体的に生きるのか」を考える“21世紀法要”が行われました。

満堂の130人とともに語り合った5時間を振り返り、実行委員の浜本さんがその思いを綴ってくださいました。

呼吸するお寺 呼吸する会場

2000年12月24日、應典院の本堂は呼吸していた。100人を超える参加者で埋まった会場は、たしかに息づいていた。会場の空気がいっせいに立ち上がる瞬間に、私は遭遇した。眩暈（めまい）を覚えた。「21世紀法要」は、濃密でかぎりなく散漫で、出口の見えない熱が渦巻くような時空だった。不思議な時間だった。

「21世紀法要」終了後24時間あまり、会場の frame（こだま）が私の中で響き続けた。濃密で散漫な時間が、私を呪縛していた。

「21世紀法要」とは何だったのだろう？　謎のような問いが私の中で谺する。

はじまり

たしか2000年の6月はじめだった。職場に應典院の秋田さんから電話があった。今年の12月24日、クリスマスイブに作家の辺見庸さんをよんで「21世紀法要」をやろうと考えている。実行委員会をつくってそこで企画を立ち上げたい。協力願えないだろうか。という内容だった。〈應典院〉〈クリスマスイブ〉〈辺見庸〉。この取り合わせに「おもしろい」と乗った。

すべてはそこから始まった。

ワークショップとしての実行委員会

実行委員会を構成していたのは應典院スタッフも含めて13名。その多くは関西NGO大学になんらかの関係をもっている人たちだったが、職種も年齢も背景もさまざま。最初の実行委員会から「21世紀法要」当日まで、半年近くのあいだには、本当にいろんなことがあった。おそらく、実行委員会に加わった人それぞれが、思ってもいなかったようなこと、予想もしなかった事態に何度も遭遇した。実行委員会が崩壊するかもしれない危機も、あった。

いま、振り返って考えてみると、実行委員会は長い時間をかけての「ワークショップ」だったのではないか、と思う。「ワークショップ」はもともと「共同作業場」や「工房」を意味する英語だ。ワークショップとは「未知の何かをグループ共同で生み出す創造の技法」とする中野民夫氏の言葉どおりに（『ワークショップ』岩波新書）、「21世紀法要」実行委員会は、まさにワークショップそのものだった、共同作業の工房だったと思うのだ。



実行委員それぞれが知恵や経験や技能を出し合い、グループの共同作業によって未知の何かを、新しい価値を生み出していく。その作業に、創造する濃密な時間にたずさわったことは、何ものにもかえがたいものだった。誰かと何かをともに作り上げるときの、飛翔するような美しい瞬間や深い喜びを、私はこの実行委員会の中で何度も体験した。その経験の記憶は、おそらく私の中に残り続けていくだろう。

「散漫」という呪縛

「21世紀法要」のあいだ、ずっと私は「散漫だ」という辺見さんの言葉に呪縛されていた。「つるつるした」「質感のない」言葉でしゃべる「危機感」のない「若い人」という辺見さんの認識と、「散漫」なイベントに熱を内向させる会場の空気に、翻弄されていた。そのどちらにも応えきれない主催者側の自分に焦燥していた。生き物のような会場の息づかいに慄然とする思いだった。

おそらく、そうは体験できない“場”だったのだと、いまにして思う。さまざまな思いや力が錯綜し渦巻いていた「21世紀法要」の空間。実行委員会の私たちの思惑をはるかに超えて、「21世紀法要」は奔馬のように駆



けていたのだろうか。

実施後のアンケートの回収率は、ほぼ50%という高いものだった。評価は「よかった」と「物足りなかった」とに二分された。ほとんどのアンケートにコメントが書き添えられてい

特別寄稿 「21世紀法要」に参加して

芸術文化総合研究センター
伝統と文化を考える会　染川　明義

辺見は明らかに苛立っていた。感想を求められて「散漫だ」と評し、最後まで若者たちとはかみ合わなかったように思う。

「いまの若者たちはコミュニケーション下手だ」というが、下手というより、まるでかみ合っていないように見えた。つまり、コミュニケーションしようとして「うまくできない」のではなく、「しようとしていない」、あるいは「できない」のではないか。

そんなふうにかみ合わなかったことのうち、辺見が問いかけていたもっとも大きなテーマだと思われる「個」について、私なりに考えてみたい。

辺見のいう「個」は、集団に対する個であった。集団から自立している個。国家や民族や宗教という集団から独立している個である。

若者がいう「個」は、自分探しの個である。その個は社会にも家族にも居場所が見つからず、それが不安でたまらず、集団を求めている個。自立どころではないのである。

いや、自立していないものを個と呼ぶべきなのだろうか。これは、部分であって個ではない。本来、群の動物である人間が部分であることを拒絶して、個として自立するという生き方は、じつは大変な力業なのではあるまいか。

これまでは集団あっての個であった。人類という種は、種を保存する手段として集団をつくってきた。しかし環境変化によって、集団が個の生存を危機に追いやるようになり、個と集団の関係に変化が起きはじめているようなのである。

そして、個人主義に基づく民主主義の出現は、人類の生存方法に進化が起きはじめた、と考えることができるだろうが、日本人はどうか。

日本人は、部分であることを拒絶したわけではなく、たんに切り離されただけのことである。つまり、日本人の民主主義には主体性や自発性は、残念ながら、ない。国旗国家法、教育基本法改正等々、民族主義への傾斜が明確になってきている。すなわち民主主義の危機であるが、そういった危機感をもっている若者は、どれぐらいいるのか。辺見は、そういう状況を群の外で不快感をあらわにして、警鐘を鳴らしているのだ。

辺見は遁世者だな、と私は思った。家を捨て世を捨てる、捨聖の遁世者である。そういう意味で、辺見は日本文化の伝統的な人物である。

古代社会が崩壊した平安末期から近世社会に移行するまでの間、歴史は乱世という状況を生みだした。この乱世の時代に多くの遁世者が出て、すぐれた著書や事跡を私たちに残してくれた。

しかし、いま私たちが必要としているのは、遁世者ではなく異端者である。異端者は、日本の歴史にはほとんどいないが律令国家成立期と明治維新は例外で、多くの異端者が活躍した。中臣鎌足や行基、高杉晋作や坂本龍馬などはそうだろう。辺見は異端者にはなろうとしないのだろうか。

詩人のハベルが大統領になったチェコのように、はたして詩が、あるいはマルタの歌のように歌が、この日本で力になり得るのだろうか。

だが、ハベルもマルタも遁世者ではなく、異端者として生きたのである。そうであればこそ、彼らの詩が、歌が、力となり得たのである。

このようなことを立ち止まって考える機会をつくってくださったことに心から感謝します。



た。「21世紀法要」というイベントに対して、何かを言ってやろう、自分の思い・意見を書きたい、という気持ちが紙にあふれていた。

もしかしたら、これらのアンケートが返ってきたことだけで、「21世紀法要」は“成功”したと言えるのではないか。自分が参加したイベントについて、アンケートにコメントを書き連ねるほど、参加者の気持ちをよくもわるくも刺激することができたのなら、それだけで、“なにか”はあった、と言えはしまいか。

参加者は、應典院の時空が呼吸し立ち上がる瞬間に立ち会ったのだ。その場に居合わせたひとりとして、かすかな希望のように、そう思う。

「21世紀法要」という“謎”

「21世紀法要」のあと、私は深い脱力感の中にいた。

辺見さんの言うように、私たちは「つるつるした」「質感のない」言葉と感覚で生きているのだろうか。でも、と私は思う。「55年体制」すら「歴史用語」となった世代は、その「つるつる」さこそ切実な現実なのかもしれないのだ、と。

安易な世代論に与そうとは思わない。ただ、つるつるした質感のない“いま”を、私たちは生きていくしかない。そこから何が見えるのか、何を汲み取るのか、それは私たちに課せられた問いだ。つるつるした言葉でしゃべる「危機感」のない私たちは、それでも自分の生を引き受けて生きざるを得ない。大きな理論や枠組みが崩れたあと、そこに生きていくのは私たち自身なのだ。自分の身体に依って生きていくしかない。その裸形の自分を自覚したとき、辺見さんの言葉につながる何かを、私はつかめるのだろうか。

「21世紀法要」とは何だったのだろう？　解けない謎のように私はつぶやき続ける。

もし、すべてのものはつながっていて、いつかそのつながりがわかるのだとしたら、「21世紀法要」という“謎”が、解けるときがくるのかもしれない。あるいは輪廻転生の先に、かもしれないけれど。

“謎”は、私の一部となって響き続ける。

21世紀法要実行委員
浜本裕子



VOICE ボイス

今回のVOICEは前田厚子さん。應典院で開講している、こころについて気づき、学ぶ場「こころの教室」で前田さんは活動されています。應典院のコンセプトのひとつである、「気づき」。こころをキーワードに活動を通して感じられたことをお聞きしました。



私が「こころ」について興味をもったのはバドマ幼稚園のお母さんの集まり「ステップ」という、心理学に基づいた教育プログラムに参加したことがきっかけでした。他のお母さん方と話したり、話を聴いたりするなかで人とのつながりを感じ、人間関係をつくってゆくための学びがありました。こころの教室の原点はそこで知り合ったカウンセラーを中心に生れたエンカウンター（出会いの場）グループなのです。

應典院が建築されてからは場所を移して自分の心に気づき、心を学ぶ集まりとして始まりました。

「こころの教室」を通して、人の思いに出会い、そして自分の思いにも気づき、問いただすようになります。私自身もじっくり自分と向き合うことで、肩の力が抜けて楽に生きられるようになりましたね。結局、人のなかで生きるのですから「謙虚に生きる」ということがとても大切なのだと感じています。

應典院での活動はもう4年になりました。残念ながら寺町倶楽部の催しにはなかなか参加できないのですが、私がそれでもこうして心地よく過ごせているのは、おおらかに包み込むような應典院の持つ一種の雰囲気によるものが大きいですね。

また、利用する側もどんどん変っているという印象を受けます。例えば演劇で使用する若い人たちも應典院を自分たちが使いやすいように工夫し、回を重ねるごとに学習しています。成長しているのです。

今後、應典院に私が望むのは、貸館の機能を充実するだけではなく、やはりお寺なのだから、仏教らしい催しもしてもらいたいということです。それは何も信仰を勧めるということではなく、「宗教心を問う場」としての役割です。そのような拠り所となる場となることを期待します。

秋田住職発 應典院掲示板

去年から浄土宗基本構想会議の一員として21世紀の浄土教団のグランドビジョンづくりにかかわっていますが、このたび年始にあたりそのエッセンスともいうべき「浄土宗劈頭宣言」が発表されました。

この宣言を一言で要約すると「愚者の自覚」となります。浄土宗の開祖法然上人の念仏とは何よりも自らの至らなさを愚直なまで見つめることであり、この愚者の自覚の人間観こそ21世紀の諸問題を解決する出発点である、と結んでいます。

公共とか市民社会とか、実態もよく分からないまま掛け声だけが一人歩きしているいま、改めて私と社会を結ぶ原点として、誰もが「愚者の自覚」をしっかりと噛み締めるときではないでしょうか。まず私の内面に深い光を当てなおすこと。そこから本当の「参加」が始まります。

■サントリーのシンポジウム



昨年12月11日、宝塚のピピアめふでサントリー不易流行研究所主催の「サロン2000」が開催、各界から150名の参加者で賑わいました。

これはサントリーが都市の文化人の呼びかけて実施するもの。記念のシンポジウムでは、「いまコミュニティがおもしろい――仕掛け人、多いに語る」と題し、生活環境文化研究所の橋本敏子さん、そよ風のように街に出よう編集長の河野秀忠さん、そして秋田住職の3人で語り合いました。

フロアは、一般企業、大学、行政の参観者が多く、應典院の試みに大きな関心が寄せられました。

■NPOの専門書に寄稿

このたびミネルバ書房から「NPO非営利セクターの時代――多様な協働の可能性をさぐる」が新刊、秋田住職の発言が掲載されています。本書は99年11月に近畿労働金庫が開催した「ろうきんNPOフォーラム」を再構成の上、再録したもの。

日本NPOセンター・山岡義典さんや大阪ボランティア協会・早瀬昇さんらの論壇のほか、当日のセッション「NPOの実践から」で、コミュニティサポートセンター・中村順子さん、京都NPOセンター・深尾昌峰さんらといっしょに秋田住職も発言しています。やや専門書的な固さはありますが、よくまとまった1冊です。2000円。

■ボランティア学習について討議

今年2001年は国連の制定した「ボランティア国際年」。これに関連した催しが数多く企画されていますが、去る1月13日、秋田光彦住職らがゲストとなって、講習会「地域が育つボランティア活動――NPOから教育現場へのアプローチ」が開催、学校と市民の提携のありかたなどについて話し合いました。



これは、主催が大阪府、実施がNPO法人関西こども文化協会という、行政と市民団体連携によるユニークなもの。立命館大学中村正助教授や現場の中高校の教員、NPO関係者と教育とボランティアについて熱心な意見交換がありました。会場は学校の教員をはじめ約100名の参加者がありました。

■應典院清掃に前田信昭さん

今年1月から應典院の館内清掃に前田信昭さんにお手伝いしていただいています。

去年から大蓮寺清掃に就いていましたが、そのうち週2回火曜・土曜の午前を原則に、應典院のお掃除に回ってもらうことになりました。さすが男性の力技で、すごくきれいに磨き上げてもらっています。

20世紀最後の自分感謝祭

昨年12月26日、年末恒例の自分感謝祭が開催、昼夜の2回でのべ31名の参加がありました。

これは一年の自分の仏さまに懺悔して、新しい年に誓いを立てる應典院のオリジナル法要。97年の最初から毎年恒例の行事となっています。藤田礼子さんの電子オルガンの荘重な調べにのせて、参加者ひとりひとりが懺悔と感謝のカードを供える、厳かな儀式となりました。

照明と音響に彩られた本堂は、20世紀最後の儀式にふさわしい雰囲気でいっぱい。秋田光彦住職のファイナルメッセージでは、私たちのいのちの尊さについてお話がありました。また、夜の部終了後は、恒例の年忘れ交流会もにぎやかに催されました。

